

# 電車の中心で鮒が浮かんだ愚か者

2016年05月21日

今朝の通勤、電車の中のリーマンどうしのプロ野球談義がウルサかった。僕は野球にあまり興味がないので、選手の名前を聞いてもよく分からないんだけど、何様？ってくらいの選手批判と解説。朝から声でけーよ；

何様？的なノーガキなら、ヘラ釣りでは自分もそうなので彼らを批判出来ないし、批評自体は批判どころか歓迎だ。今朝はただ、場所と時間が問題だっただけ。

僕は以前から、茶の間でプロ野球やサッカーを観戦し、解説者顔負けの喋りを展開するファンに対して健全な状態だと感じている。そしてそれを、Facebookでもそうだし、あちこちで表明してきた。実際、僕のFB友達の皆さんの中にも、そういう投稿をアゲる方は多い。が、ヘラ釣りに関しては発言に消極的な方が多数だ。これは何故だろう？と感じ、以前からずっと分析していた。

- ・語るべき理論が自身にない
- ・ヘラでスターの批判はタブーと感じている（みんながみんな、有名人と繋がってはいないだろうに）
- ・洗脳されているw

こんな感じ。

でも今朝気付いた。

トンチンカンな解説だろうが何だろうが、持論を展開するのがその道のファンなんじゃないの？と。まさか、全国の茶の間のスポーツファン全員が、解説者顔負けの知識と世界観を持っているとは思えない。でも、平気でやる。茶の間の彼らが共通して持っているのは何かと言えば、「無責任で無根拠な自信」だ。今朝のリーマンのように。

コレって、ヘラだって同じじゃないの？と。釣り天狗って言葉は大昔からあるワケだし、総トーナメント化は、いつかは自分もス〇タツやオカ〇ヨになれると信じればこそ。ヘラ師にも「無責任で無根拠な自信」はある筈なのに、スターへ向けてのあからさまな批判、専門誌顔負けの解説が少ないのは何故か。

それは、ヘラ界のスターのほとんどが、それを生業とするプロフィッシャーマンでは無いからだ、と。...説明を続ける。

インストラクターやモニターを引き受けるメーカーとの契約上、僅かな金銭は発生しているかもしれないが、職業ではなく趣味としてヘラ釣りと対峙するスター達とは、「自分も同じ立場だ」と重ね合わせ（＝総トーナメント化のひとつの要因）、自分も同列に居る以上ブーメランが怖くて迂闊に批判は出来ない。つまり、明確な線引きが無いからこそその遠慮。別世界の人達ではないと思っているからこそ、ヘラ界のスターに有名税を支払わせるのは気が引けるのかも、なのだ。SNSで繋がることも出来たりすれば、尚更。スターの彼らを別次元だと言い、憧れだと言いながら、無意識で下克上を狙っているのだ。ところが、プロ野球選手やプロサッカー選手に、多くの人はまずなれないし、自分も同じだとは勘違いもしない。SNSでも簡単には繋がれない。僕にとって、シロウトによる無責任な評論がある方が、ある意味健全な業界だというのは、そういうこと。

ヘラ界のニシコリ、ヘラ界のリョウ、ヘラ界のイチロー、ヘラ界のカズ。。。門外漢にスターの友人を紹介する際、業界が違えばスゴイ人なんだぜ！と力説すれど、悔しいが小さな業界のスターであることもまた事実だ。

他のスポーツジャンルだったら、現在のヘラの停滞と沈滞は、メディアやスターが批判対象になる筈だ。10年前、20年前と変わらない理論を繰り返し掲載。すでに普遍的なものとしてなら構わないが、新しい視点として紹介するのはマズい。引用元を明かさなければ盗作でソッコウ炎上だし、本当にバクリじゃないとしても、「偶然同じでしたゴメンナサイ」では通らない。勉強不足、リサーチ不足と片付けられるだけだ。なのに、ヘラはユルいから許されてしまう。ま、許されるというより、それに気付かない一般アングラも不勉強なんだな。こんなにも歴史を軽視する業界も、そうは無い。

本当に好きになったら、トコトン調べる。核心は、待ってたって誰も教えてくれない。だから古本だって漁る。考えて考えて考えぬく。知識を得るってそういうことじゃないのかな。中島屋で、出舟時間を過ぎて我を忘れ、膨大な「へら鮎」のバックナンバーを読み耽る。そういう情熱が無いまま、目先の上っ面の攻略法に身を委ねる。それが可能なお手軽さもまた、時代なんだけど。「中島屋って何？」は、とりあえずググることは出来ても、そこで終わる。たかだか一階層掘り下げてみたところで、お宝は出てこない。

センスの違いは認めつつも一般アングラにとっては自分と同じ立場に見えてしまっていて、実際には尋常ではない勉強と練習を重ねたスター達も、お手軽志向の一般アングラに配慮した物言いをするから、完全に無限ループだ。メディアも、スターの彼らにしてみればまだまだ基本しか話していないのに、さもハイテクニック、さも新発見であるかのように扱う。せめてその内容が基本なのか応用なのか全く新しい考え方なのかは、正確なインデックスを振っていただきたい。そのためには、予め理論や技術は体系的に整理されていなければならない。媒体によって多少順位付けが違っても、スジの通った土台が必要だ。読売には読売の、朝日には朝日の切り取り方があるように。

たとえば同じ号に底釣りの記事が二本あり、かたや落とし込みに拘る名手、かたや沖打ちに拘る名手だとする。両者を繋げることが出来ない編集部だったら、要らないんだよ。いろんな人がいてニュートラルだろうし、ヘラ釣りの正解はひとつじゃないってのも真実だと思うけど、思考停止を表すワケではない。

メディアには、メーカーに配慮したエサのブレンドやタックルインプレッションなんかほっといいから、もっともっとハイレベルでタメになる話を引き出して欲しいと願う。発行部数が少なく、本の売上ではなく広告に頼らざるを得ない以上、それはムリなのは解るんだけど、いくらなんでもいきあたりばったり過ぎだろう。今のままじゃ、食うために業界で働いてる人の立場を思うと辛いけど、未来に繋がる仕事とは思えない。いままさに、存在意義が問われていると僕は思う。黎明期と違い、まだ点在であるとしても拾い集めればこの釣りのアウトラインが浮き彫りになっている現在、申し訳ないけど僕の考える専門誌像とはかなり違う。

流行の釣り、一見新しい釣り、というものは時代時代で存在するが、少なくとも僕が成人してからのヘラ釣り再開以降、この釣りを根本からひっくり返す新しい視点に出会った認識はほぼ無い。全て枝葉だ。となれば、根幹を成す理論の形成過程は、現代の書にある筈も無い。あえて乱暴に言ってしまうと、現在のヘラ釣りを支える人達は、20世紀すら学ばずに21世紀を語る史学者のようなもの。砂上の、楼閣というか枝葉。浅いから倒れるというより、根っこも幹も無いんじゃないのか。僕の恩人、故・北城 錦氏の言葉でもある。

トーナメントシーンで「誰もが夢を見られる」ことは、ある時期まではヘラ釣り人口増に役立った気がする。が、もういい加減どうなんだろう。どうせ見るなら、「ホンモノの夢」の方が良いんじゃないか。道は果てしない方が燃えるんじゃないのか。誰でもお手軽にアイデンティティを確立出来るほど、勝負の世界は甘くない筈だ。簡単に結果が出ることはオカシイのだ。ヘラ釣りがそんな薄っぺらい世界だとしたら、僕はハマっていなかったと信じたい。が、画一的方法論で誰にでも即席で結果が出せる可能性が、自分探しに彷徨う寂しい人達を慰めたのは確かだ。

トーナメンターなんちゃら、というタイトルの連載で、一時は煽った側に僕は居たけれど、その時はそれが正義だっただけだ。

と、ここまで読んでいただいて、まだ誤解している方も居るかもしれないけれど、僕は競技を否定していない。全く逆だ。一時的な競技人口減少、ひいてはヘラ釣り人口の減少に繋がるとしても、スターと一般アングラの乖離が進むとしても、ここでキチンとプロ化はどうだろう。他力本願

が心苦しいが、そろそろ誰かやってくれないか？そう感じている。出来ない理由を挙げるだけでは、何も始まらない。出来ない理由は、裏を返して出来るための材料にするべきだ。

競技がこの釣りを発展させたことは事実。他人との競技に興味がなく、自然の中で独りへらと会話したい人も、競技派が血の滲む努力で編み出した会話術の恩恵を受けている。釣技研究は、もはや沢山釣るためだけにあるのではないのだ。へらとの、より良い・より濃密な時間を過ごすためには、さらなる発展が必要。先人が積み上げた遺産を放棄し、上っ面の方法論を追いかけるような停滞は許されない、と僕は思う。

へら釣りのプロトーナメントで、生きるための糧を得る。賞金が獲得出来なきゃ食えない。そんなとんでもないリスクを抱えてまで、本気でへら釣り向き合う者達がバトルを始めた時、この釣りの新章が始まる気がする。「遊びだから」と昼寝をする人種とも、「現時点では遊びなのに」昼寝を嘲笑う人達とも、まったく別次元の人達の誕生。

カネに目が眩んだ輩のインチキが発端で、終焉へのカウントダウンが始まるのか、全く新しい価値観が未来への扉を開くのかは、僕には何とも予測できない。どのみち、何もしなければ現在が最終章だ。根っこが無い枝葉は養分を吸収出来ない。残った僅かな養分は害虫に吸われて終わるだけのこと。

生意気ですけどね。こう見えて、意気揚々と世に送り出す文章じゃないんです。なんでこんな憎まれ役を僕が？って気分でボタンを押すんで、ご理解のほど。